

『喜見城之図』に描かれた風景考

石須 秀知（魚津埋没林博物館）

はじめに

『喜見城之図』（正式資料名：魚津蜃気楼之図附喜見城之図断(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵))は、寛政9年4月(グレゴリオ暦換算で1797年5月)に加賀藩主前田治脩が魚津で見た蜃気楼を絵師に描かせた図。場所、日時、蜃気楼の形状なども付記され、江戸時代の魚津の蜃気楼資料として最重要なもののひとつである。そこに描かれた風景と実際の風景との対応について考察する。

1. 喜見城とは

- ・古代インドの世界観で須弥山の上であり、帝釈天が住むとされる城。善見城（ぜんけんじょう）とも
- ・蜃気楼の別名としての“喜見城”・・・加賀藩主前田綱紀(1643 - 1724)が魚津で蜃気楼を見、吉兆とよるこんで命名と伝えられる。(魚津古今記)・・・魚津独特の呼び方(近代まで使用)

2. 『喜見城之図』とは

- ・加賀藩主前田治脩(1745 - 1810)が江戸から金沢への道中、宿泊地の魚津で蜃気楼に出会い、絵師に描かせたとされる。(右図)
- ・蜃気楼を描いた6枚の細長い絵を实景の絵の上に重ねながら、変化する様子を見られるように工夫されている。⇒現在のパラパラまんがやアニメーションに通じる画期的表現。
- ・“御旅館(御旅屋)”の上空から富山湾を俯瞰した形で描かれる。

3. 描かれた蜃気楼に関する記録

観測日：寛政9年4月13日＝今の暦で1797年5月9日ごろ

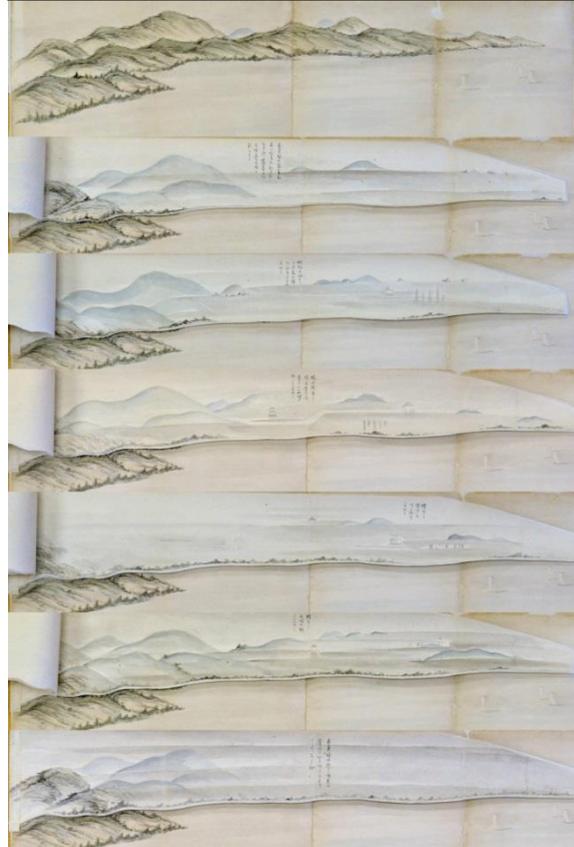
観測時刻：申の上刻＝午後3時ごろ、未の中刻より酉の上刻に及ぶ＝午後2時ごろから午後5時ごろまで

観測方向：“岩瀬浜の森に当りて”



魚津蜃気楼之図附喜見城之図断(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)

上：全形、下：部分拡大



4.描かれている風景

『喜見城之図』は、手前に御旅屋の庭園があり、漁船の浮かぶ富山湾をはさんで対岸の風景(実景～蜃気楼)が描かれている。文中では“岩瀬浜の森に当りて”と記述されてはいるものの、より広範囲が描かれているように見える。

対岸の風景(実景)は、当然のことながら当時はビルや工場、発電所などの目標物がないため、具体的に図のどの部分が実際のどこに相当するのか判別し難い。

しかし、左側の海岸線の形や、デフォルメされてはいるが山並みの形も、描かれている範囲の特定に利用できそうである。

5.御旅屋の向きを基準とした推定

御旅屋(現:大町海岸公園)の場所では、海岸線は南北に伸び、ほぼ真西に面している。図に描かれた御旅屋庭園の塀(柵)は、左側が海岸線と直交=東西、右側が海岸線と平行=南北の線と見ることができる。

御旅屋の塀を東西-南北の基準線として見ると、南西の方角には、手前に張り出した海岸線と、その奥に高く目立つ山が描かれている。これは実際の南西方向、滑川市高塚の海岸線と、富山市・砺波市・南砺市にまたがる牛岳(987m)によく一致する。

一方、図の右方にかけて連なる山並みは、実際の風景との一致が良くない。

やや苦しいかもしれないが、図の中央に突出した山は、高さが誇張されているものの手前に描かれており、蜃気楼観測時によく目立つ呉羽丘陵に相当するのではないか。そしてその右奥に描かれた高い山は石川県境の医王山に相当し、図の右端が肉眼で対岸の地形が読み取れる限界に近い西岩瀬(富山火力付近)と解釈するとともに自然であると考えられる。

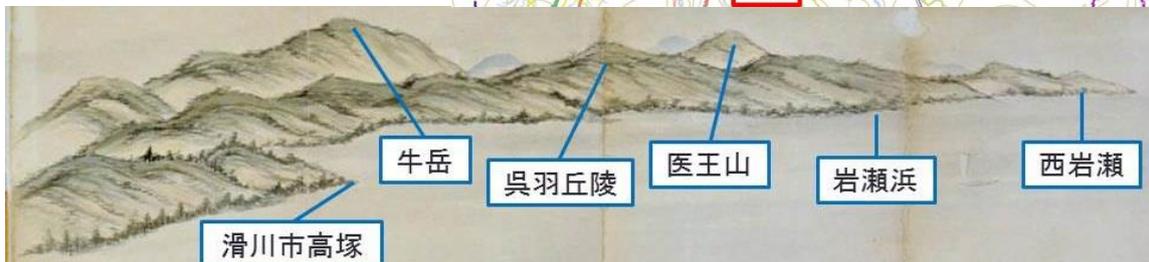


図 推定される地形対応